戚參軍集

代吉

此度児軍等發句
集出梅以美しく相
相まし発手に成候方
しくるは〻まを不計意
まの勢手に仍て一部
進呈仕候笑覧の枝
たし病中略書候免
て〻不一以上

成美

此集は故有てはやう見めでにたれば、いで我も序をかきまゐらせてんと成美ぬしに契侍りしかど、ぬば玉の夜ひるとなく、四方八方の責をふせぎかねつゝ、春日秋夜を、くれがたく明がたき物としも覺えず、たゞまぎれにまぎれ筒のみ在ふる間に、心にもあらで年さへこえぬべう成にたれば、萬なげうちてなん。抑俳諧の道は我しらぬ事ながら、古今集にすでにはい諧歌を撰入られにたれば、其根ざしふりにたらずや。されば末の世には、橘の八千またに枝葉たち榮ん事うべ也けり。謌と俳諧のけぢめは、只みやび里びの詞のみにあらず、其もとむる意に在とぞ。思ふに清少納言が船のみちを、とほくて近き物といひしにひとしかりぬべし。何がしとやらんの句に、麥くひし雁と思へど別かなといひしなど、

げに遠くて近き物となん、いと若かりしをりきゝ侍りき。今、成美ぬし、とし比この陰によりて月花は更也、をりにふれ事につけて、大方の思ひよらぬふし〳〵を、はつかなる句にいひのばへ給ひしを、埋木のくちはてなんをゝしみて、其木陰に拾集たまひて、こたび花ぐはしさくら木にゑりて、天地のいやとほ長く傳へてんとかまへ給ふるは、おのづから孝の道にもかなひ、且は世のすき人も、時じくに此櫻の陰によりつゝ、名にしおふ芳野のはなをしも見が如く、唐にしき立田の紅葉なす、しく物なしとめでざらめや、たゝへざらめや。

賀茂季鷹

成美家集序

成美翁。俯仰古今之觀。包含自然之思。攬天地之慘舒推遷。人事之聚散離合。喜笑怒罵。所會之境。所遇之景。皆寄之徘(俳)諧。其抽思也無窮矣。故能寫人難狀之象。其吐奇也無測矣。故能述人所未道之妙。寄之山嶽歟。孤峯萬仞。絕嶺千丈。可以攬象緯。可以抉雲漢焉。寄之江海歟。浩蕩瀰漫。一瀉千里。波濤馳驟。風雲飛騰之狀。可以奪膽。可以駭目焉。寄之富貴華麗歟。金屋珠欄。虹翠分鄰。貂璫俊雅之豪。嬌嬪媚嫵之麗。可以悅人之目。可以動人之心焉。其餘隱逸緇流徘(俳)優雜伎之意。千象萬狀。使覽者拭眥極目。心駭神悸。瞠乎莫甄別。其所以寄懷也。是以四海騷人推以爲一代之宗匠。嗣子包壽與及門之士。就其華林金谷之園。挹其菁華。咀其至味。錄爲二卷。上梓刷印。以布於世。雖未足罄翁之富贍。覽者須觀其瀾。而測其浩瀚泛濫。無所不有之大矣。文化丙子春正月

緒瀨龜田長梓撰

古作妻翠校字

成美家集上之巻

春

としのうちに春たちける心を

ふゆの春卵をのぞくひかりかな

年のはじめに

けふに明て無筆歌よむ國の春

おろかにもをしみし年を君が春

看經もそこ〳〵にしてはなの春

ぬけて出る夜若よりすぐに花の春

元日も過ゆくくさの扉かな

ものむつかしきあたりなれど、

さすがに松ども立わたしたるは

小家みなわが春〳〵とおもふかな

男贄亭諫圖
常菴子強　仝校
坎窩久臧　補定

芒に霜の髭四十一と、はせを翁のたはぶれ申されけるそのとしのはるをむかへ、吾蓬萊のかざりものに白蓮の交を思ひよそへて

わらへ人薤（とろ）と海老とわが髭と

哭蓁嶠子

雪あられふりあるゝにつけても、いかに〳〵と思はぬ日なし。さりとも梅さくはるにうつらばなど、はかなきたのみをかけしに、日こそあれ元日といふ夜のほどに、むかし人の數に見なしぬ。門にたてたる松竹も、いまは恨みのたねとなり、小庭に來なく鶯も、たゞなみだの友となるばかりなり。

なに事もひと夜につきし千代の春

元日もはやくくれて、ふつかもすでに過ぬ。

三日減るはるやそれだけ月になる

松しまもそこらにあるかはつがすみ

門さきの枯木もかすむこゝろあり

せりよめ菜すこしの事も霞けり

目にあきて龜のとびこむかすみかな

かすみ來てまぎれにけらしふる小袖

葬かきはらひて春をむかへしも、としははからず市中にありて

いまさらに面目もなしかどの松

人日にしたしき人のうせけるに

おもひつゞけし

門まつもなみだをそゝぐものなる歟

人日對久臧

薺うつ江戸品川は軒つゞき

妹が子は薺うつほどになりにけり

老の浪年くはゝれども丈山翁の心操なし

春を見に淺草川をわたるなり

春のれうとて背竹にて製したる茶筌を賣人あり。その八病なくして卒にたふれたり。牛の價を論ぜしよりも猶はかなさのたぐひなくて

大ぶくや泡と見し世の人のうへ

子日せし跡とや人の立ありく

まづひとり旅人通る子日かな

さくと見てふた夜過しぬ風の梅

咲梅にひかりあはすや貝のから

假家に名ふだかけけりうめの花

人すめば水もこぼれて藪のうめ

われことし三十六、安仁が鬢の髮やゝしろみたり。宗祇法師が髭とはとたがひたれど

香をとめて白髮愛せん窓の梅

野の杭の人とも見えてうめのはな

ふる家や賣そこなふてうめの花

寒村野梅

古澤や牛に嗅(嗅)るゝうめの花

淺くさや梅すくなくてはるの空

うめが香を袂にいれてそら寐かな

梅がゝや灯心かけし軒のつま

うめが香の家一ぱいに小雨かな

子どもの道中すぐ六といふものうつを見て

東海道のこらず梅になりにけり

擬古

梅に立や錢なき詩人淸く瘦て

紅梅に大根のからみぬけにけり

うめ柳ひとつふたつはとしもとれ

題畵

家ありてまた柳ありどこまでも

おもしろや柳の間を人のゆく

春の柳もたれごゝろになりにけり

でくるぼのやなぎをわくる扇かな

家はみな春は柳でおもしろし

青柳に留主はあづけむ門の鎖

くゞりこむ春となりけり門やなぎ

魚提て柳がくれにもていりぬ

亡父の忌日に

しかられし夢は柳のしもとかな

階子とるあとは芽になる榎かな

とし寄の鳩によばるゝ木の芽哉

田家

わか菜摘てやがてけぶりを立にけり

猪のふむあとさへ春につむ若な

春の草ひきむしりても喰ふべし

よくいねて今朝目にかゝる春の草

はや誰か扇すてたるはるの草

別玉屑

はるの草心さぶさを抱きけり

草菴

鶯をきくにもさはる葎かな

うぐひすのうすぐろくなるゆふべ哉

うぐひすのかくれあらはれ見えずなりぬ

うぐひすや浮世にすまば中二階
うぐひすのなく音を顔にかけてけり
鶯やふた聲ほどは案のうち
かつしかの蕎居のなつかしきに
住し藪の鶯かいま聲するは
と申いで侍れば、かたへにある人
春さびしとやしたひ來つらん
かく附侍し。これらはいかいの連歌ともいひふべきにや。
海苔たゝく家とて杖を入やすし
正月はからかささへもおもしろや
正月のこゝろ崩るゝ彼岸かな
涅槃會のあくる日、すみだ川に棹さゝせて三河法師が幽扉をたたく。
春さぶし月まつほどの後世がたり
ある禪師のいはく、風雅は俗にちかく、俗は風雅に遠しと。
はる雨や博打に隣る夜手ならひ
はる雨や窓はいくらもほしきもの
春雨はみるふさぬるゝ雫かな
はる雨や編笠ごしの音羽やま
春雨やふるにさはらぬ茶の煙

題 按摩取

はる雨や化物ばなし錢五十
起〳〵や舌もつれしてはるの雨
朧月やなぎの枝をはなれたり
朧夜や吉次を泊し椀のおと
かまぼこの煙へだてゝはるの月
さゝやかばくもりもぞするはるの月

少年行

印籠をたづね戻るやはるの月
錢吳き人にあふ夜はおぼろなり
くさの戸や丸くなくともはるの月
鯛の汁喰ふて出たれば月かすむ

讀論語

春の夜や酢を乞に來る隣あり

餘寒

はるの寒さたとへば蕗の苦みかな
古沓の唐までもゆけはるの海
光琳が畵に汲るゝやはるの水
すぢかひに痳ても見ゆるや春の水

墨水晩望

人うつす水のこゝろもはるなるか
はるの水まがり〳〵のおもしろや

乙二坊に對す

春風のあとさきもみな咄かな
鎌倉の世から畑うつおとこかな
寒食のこれをもいとへ唐がらし
かげろふやいせの御祓捨てある
陽炎や世はとにかくに捨にくし
何となく見らるゝ鳥のから巣かな
巣をたちて鳥の心はあともなし
艸の雨土器屑になく雉子
魚提て松やまゆけばきじの聲
草山や潮じめりにかへる鴈
かへる雁ばら〳〵になりて見ゆるなり
はたご屋は夜も戸たてずかへる雁
雲雀たつ七野をふたつ見殘しぬ
蛙なくそばまであさる雀かな

露の雨おのが二月となく蛙
かはづ鳴里の雨夜も小百年
春の鳥何をおもひぞ胸ふくれ
草臥や身をたふれたる蝶の中
とびたちてもろきは蝶のこゝろかな
ひら〳〵と墓原までもはるの蝶
蝶まふや薪一把も門ふさげ
白魚のすこしまがりて長閑なり
しら魚はお僧すこしはまゐられよ

わかき時より虚弱多病なるを、亡父のつねになげき思はれしに、病身つゝがもなくてやゝ老の數に入ぬる事、わづかに孝のひとつとやいふべき。

かい撫の春やむかしに吾しら髪

讀寡婦賦

春の夢さめて隣のはなしかな
接木して花さくと夢に見たりけり

待花

はなやさく心にかゝる夜着の襟
何ともなき世の中やはつざくら
あはたゞしけふ花さくと人はいふ

田家にひと夜ふたよ泊りて

寐過すや麥のあさ露桃のあめ
はら〳〵や桃はちるときをしいもの
紙雛は花見る顔に書にけり
歸らうといふまで人の汐干かな
西行は汐干を見てもなかれけり
ねるほどは風ふく花の木の間かな
花の中大事にもてよ桶の水
をれながら芽をはる花の下枝哉
貧乏が追ふても來ぬぞ花の陰
おもふ事花にまびれて何もなし
はなに寐て起てももとの春日かな
朝飯を過すや花の鐘がなる

わが多辯なるを人のにくみけるに

ものいふもいやなりけふは花の蔭
へな〳〵とするや小橋もはな心
なまなかにかへる家ありはなざかり
花のなかすこしちれともおもふなり

源氏物がたりかり侍て、そのぬしなくなりて後、空庵へかへしつかはすとて

花鳥もおもへば夢の一字かな

江口の女の象に乘たる畫に賛のぞまれて

ねぶき眼をひらけば花の浮世哉
石川や飛わたりするはなごゝろ

上野にて

宮さまもおよらぬさうな花に風

帶草紙

ちとせふる松だにくゆる世中に
けふともしらでたてるわれかな

これは松樹のきりくひに火のもゆるを見て書寫の性空上人の吟じたまふとなり。

ちるはなの中にたちたる此身かな

花の句あまたよみける中

花を折こゝろいく度もかはりけり
願に杖する花と身はなりし

冥々が七十の賀

いつまでもかくてませ〳〵はな千句

六になりける娘のそのかの母と手たづさへて堇ほり、つばなぬきてあそぶに、あるやんごとなき方の花見し玉ふとて、上臈たちの立ありきつゝ、あこよ、名はなにと、としはと、とひたまふに、ふしめになりて名は糸とまうす。年はこれとて、ゆびひろげたるに、みなあひきやうありとてわらひ給ひぬ。たかき人に名をきこへあげしを、かれが一世のめいぼくにして、そのみな月なくなり侍しが、ことしかの花の陰もなつかしく、ひとりすみだ川に杖ひきて花見ありくに、さらにこゝろもなぐさまず。古墳の柳のみ風にうごきて、したふがごとくうらむが如し。

しなばやと櫻におもふ時もあり

晋子嵐雪が像に、おの〳〵花の句を題せよと人の望ける。二句

花に醉て涎もすぐに十万句

出ぎらひの身をふり埋め花の雪

重箱に鯛おしまげてはな見哉

掛乞の顔もわすれてはなの蔭

閑齋が古家もとめてすみはじめけるよろこび

うす壁や鼠なく夜もはなの空

をれぬすめとても花には狂ふ身ぞ

遅日を

泥水もはなをうかめて暮かねし

哭浙江

膝をかさね頤をもたせて俳句に交りし事二十餘年なりし閑齋が閑も、いまはまとの閑になりて、ながく作意を閑事なし。

はる雨やそこにより居しはしらあり

いつのとしもすみだ川に腰をおされてたづさへ遊びしも、ことしは

杖とたのむ人あらば花も見やうもの

關屋の里のみやこ鳥、嵯峨の鮎くひにといざなはれて、旅ねの夜のうす蒲團に東山のたゝずまひ、まづなつかしと、此曳杖をはじむる秋香庵が笠のうちに顔さし入て、かくぞさゝやきける。

踏ところ草鞋にかゝるはなの塵

あるやんごとなき人の、杖つくやうやしりてあるとの玉ふに、なにともおぼえ侍らずと答申せしに、杖をいさゝかもたのむ心なくつくべしと仰られし。此ことわり何事にもかよひてたふとくおぼえし。われ脚病、脛よわければ、はつ老のけふより杖をもちふるに、かの御ものがたりはおもひ出ながらかくぞ申侍る。

たのむなり花の跡とふ竹の杖

さつとちるはなを拍子やもどりあし

灯ともすにこれはいつまでちる花ぞ

ちるはなや舞も出べき腰あふぎ

永日のこゝろを

よく見れば捨し山葵の芽になりし

こゝろのとまる戸がくしに咲たりなひのみこ飯の小ざくら

是はしなのゝくにの曰ひきうた

なりとぞ。此こゝろを發句にせよと、柳荘がもとよりいひこせしに

あふむけばロいつぱいにはる日かな

野遊のこゝろを

くれるまで我もすみれの上にゐて

野の堇しづかにあゆむ烏かな

狼に夜はふまれてはなすみれ

勇の字の題を得て

蜂の巣をひとうちにして畫寐哉

一飄上人の新室は俳士をあそばしめんれうなりと。われまづひと夜ふたよの枕に疊を汚さんとす。

夏ちかの誰も柱によりやすし

山吹に畫なく雞のすさまじや

やまぶきや牛だまされて芹生まで

やまぶきやさくらがちれば我もちる

山ぶきに日のさす春もいますこし

菜のはなに夜のおぼろはやぶれけり

ものいはぬ人も春なりふぢの花

身のひまやうしろあゆみにふぢの花

かたげゆくこゝろとなるやふぢの花

としよれば見さだめがたし藤の花

竹をみるこゝろとなりて春はゆく

よしもなきしる人ふえてはるは行

長恨歌

養在深閨人未識

ゆく春を鏡にうらむひとりかな

春の山けふはや夏におしかゝる

三月盡の日江嶋にあそぶ

頼朝の献立つきて春のくれ

巣光が千住の茅舍にひと夜とまりて

ゆくはるやおく街道を窓のまへ

おもくわづらひて、はるもなかばすぎゆくころ

いかのぼりいかになりゆくわが身ぞと

おもふもそらにくるふこゝろか

夏

我まへに雲行影やころもがへ

耳のなるともわすれてころもがへ

更衣膝にまづおくひねり文

世まかせのこゝろともなれころもがへ

四月はじめ、はこねのゆあみに出るとて

うり月たつ宿は草木にまかせたり

白ぼたん崩れんとして二日見る

このゆふべ鬼に喰れし牡丹かな

日くるゝにいつまでつぼむかきつばた

杜若花のそばよりつぼみかな

虫糞に葉はたちのびてかきつばた

人〳〵筆とりて一紙を畫けば一句を題す。むかし清少納言が古歌の一字をかへていひし事を、ふとをもひ出て

かきつばた墨にこぼれても

杜若人ありと見えてこぼれ米

灰捨てしばらくけしのくもり哉
すみよしの松の木間にもけしの花
よしや世は木棉ひとつに茄子さく
すめば世に山のひくみの麥ばたけ
橋ゆけば人に見らるゝ若葉かな
わか葉して佛のお顏かくれけり
あさ起も朝寐も竹の四月哉

一日百句の中

ひろごりて伊吹にさはるとし竹
若竹やひきたわめても寐て見たし
竹の子やかたばみ草のとりついて

待郭公といふ事を

はらのたつこゝろのはしもほとゝぎす
ほとゝぎす鳴や佛の爪はじき
ちら〳〵と見しかとぞおもふほとゝぎす
藪寺や笋月夜ほとゝぎす
はしり出て紙魚も聞らん時鳥

蝶夢法師の旅寓をたづねし日、月川上人重厚法師などもろともに、いざ給へ、すみだ川の若葉の

けしき見せ申さんと、かしこより小舟にのりて

ほとゝぎすもひとこゑさそへみやこ鳥
五加木茶やふり出てなく時鳥
柴かつぎ見ぐるそらやほとゝぎす

市街はいかいうた

から臼のとなりにすめばほとゝぎす
なけども〳〵まぎれこそすれ
このすぢを人もきくらん蜀魂
はやつゆの草木となりて杜宇
塵ほどのものが鳴なりほとゝぎす
夏來れば人しづまりて閑居鳥
やまぶきに實もとまるかや閑子鳥
石臼はぬすみ人もなしかんこどり
けふもまた梨子をかぞへてかむこ鳥
かんこ鳥柳のむしもかくれけり

秋田の無事菴、わが草堂にあそぶと十日あまり、あるあさみづから本鳥(髻)おし切て、すみだ川の流にながし捨ぬ。その胸中

ちりばかりの念慮なきをみな人うらやむ。從來の無事、またいよ〳〵無事ならんとたはぶれて

似たものは客にあるじにかんこ鳥
鳴わびて戻るも見ゆる水鷄哉
世中を是でまぎらす蚊やりがな
蚊やりするはりあひもあり眞土山
後の世や蚊をやくときにおもはるゝ

葛飾三憎の中

蚤とりて有明の月は出にけり
なつのよは土器ぬれて明にけり
夏めきて人顏見ゆるゆふべかな

四月六月、草菴の名殘

鼠なき菴しげらん今宵より
みじか夜はとてもかくても過ぬべし

右移栖辭あり、略之。

短夜や蜆くふさへもどかしき
みじかよや橋にほひ月はさす

夏の人といふ事を題して句せよと人の望けるに

夏の人月にもありのすさびかな

大磯に泊りける夜、ほとゝぎすのあまたなくよし人のかたりけるが、曉までおとせざりければ

夏のよは燒酎賣のひと聲に

結制を

一笊の塩やとけゆく夏百日

五日

粽ほどくそれにつけても草の宿

粽ゆふ小冠者に戀のこゝろあり

をかしやな葎の中にふくあやめ

五月雨のあすは檜もたのみかな

五月雨や三日見つめし黑茶碗

きのふ見し旅人もどるさつき雨

五月雨や西もひがしも本願寺

さみだれに鶯なくや何のひま

さみだれのまたをとつ日に似たりけり

つゆの身をもてあつかふや五月雨

さみだれや吾かつしかは蕗の蔭

いつのむかしならん、柴扉に杖をむかへて鶴芝の三吟ありしも、たゞめのまへのやうなり。

右哭土朗翁

さみだれて我宿ながらなつかしき

味噌水もさみだれくさくなりにけり

さみだれの中に三度のけぶり哉

さみだれは喰ふてはこ(屎)するたとへ哉

虎が雨といふ題に

尺八の雫におちよとらがあめ

蟬の羽も夏はへだゝる心かな

こゝもまた蟬を浮世に山の家

なにゝこの袴着る世ぞせみの聲

いて戻れ大津車にかたつぶり

百般の世塵靜ならず、たま〳〵人來りて、いかにやなどいふにこたへて

よの中はかくして過せ蠅はらひ

蠅打てつくさんとおもふこゝろかな

海までも吹てとれ〳〵蚊屋の裾

わびぬれば蚊の入かやもたのむ也

たちばなの香にせゝられて、ときこえし風流にはたがひて

かつしかの蚊に寐かねつゝ椎の月

庭鳥もふりかへり見るゆりの花

我宿は夜さへ見ゆるゆりのはな

古家や草の中より百合の花

傘にあまりて見ゆる夏の山

丸山眺望

不二は眦よりおこり、三浦かまくらは腰のほどにつらねたり。

欲ものは箱根あしがら、臥るものは大島はつ嶋、ちかきは眞鶴のらつゞき、遠きは甲斐信濃のやま〳〵、さゝやかなるは三嶋ぬま津の家居、大なるものは夏山や袂によする伊豆の海

橘やひと夜とめたる泣上戸

あなにくや癈老鬼婆のたぐひ、鋤をぬきて追しといふ古ともおもひ出て

よし原の蠅になげうつ小判かな

いづかたに夜はしるらんはつがつを

晋子が口氣

白眼に貧乏人やはつ松魚

ふたりまで友達死で初がつを
むづかしき世も日はくれてとぶ螢
小ふくべの青みにつくやとぶほたる
貧しさに螢とぶにもまぎれけり
南無〳〵といふにもくるふほたる哉
くさの家は百萬遍にとぶほたる

鹿墟に身をしたがへて靜なるいとまなし。たゞ日くるれば俗事おのづからしりぞきて、しばらく寸心をやしなふ。

人に遠し宵よりこもる嶋の山
たちばなやむかし小袖の賣に出る

おくの東琿より十符の里のすがどもをおくりこせり。うち見るより古き名のゆかしく、めづらしく、さていとすゞしげなれば、あしたにしきゆふべにひろげつつ、三符もなゝふも誰をかふさせんなどめて興じて

夏はたゞひる寐むしろに夜の月

小梅閑室

杜宇しば〳〵鳴わたり、水鷄まれ〳〵おとづれたり。ほたる飛かふ稻葉の風も、軒にしげれる木立よりおとして、さらに扇もわするばかりなれば

月と雨かはる〴〵やなつ座敷

あさぢが原の中にこだかき岡あり。そこに三阿法師がかたばかりなる菴しめてすみける頃塚行しに、世ばなれたるすまひのすべて西上人の物ずきにかなへり。

松ふかし人目おもはで夏の月
庭中に階子のかげや夏の月

施米といふとを

麥米やころもの袖にあまるほど
貧しげに扇の見ゆる戸口かな
夏野行扇のはしもたよりかな
身のむかし戀せし人か夏野ゆく
うちはもつ人はこゝろのやはらかき

牛嶋にある釋迦像の貞觀の古碑、うすき墨にすりもどろかしたるを枕がみにかけたり。

涼しさや夢を佛に見せまうす
何事もむかしになりぬゆふすゞみ
すゞしさにいくらも喰ふや枇杷の玉
涼しさや百合も芒も手にさはる
すゞしさや家のまがりは夜見えず
貧すれば身をさま〴〵に夕すゞみ
すゞしやと人いふ聲をほだし哉
家〳〵にあひるももどるすゞみかな

南部の一草、はじめて京へゆく。しれる人のもとへ狀書てそへよといふに、したゝめつかはすとて

夜すゞみやかならず袂ひくあらむ
とかくして崩れも行やくもの峯

題　范蠡

くものみねかくれ處は見ておきし
此ごろの見るものとては雲の峯

先師去年の此頃、八仙人のかたを畫て給りければ、とく一軸にしたてゝ見せ申さんとせしに、その事はたさず。今おのれがお

こたりをなげきて

皐月來ぬ死なぬ藥も齧そらごと

ほそみちの古きひとすぢをたどり、しら川の關こえんとする羅城法師をおくりて

夏草のおくものこさぬ杖ならむ

山芋の蔓にひかるゝ清水かな

のら猫の眞葛わけ入しみづ哉

題　西行

このおくにしる人あれな山清水

吼犬もしづまる逮の夜あけ哉

撫子のふしぐにさすゆふ日かな

なでしこのばらに〳〵なるもあはれ也

新成松齋

半日は浮世わすれてねぶの花

民玉子、みちのくの名だゝる所所見めぐらんといふに、西上人のと藥をそのまゝにいひ出て、けふのこゝろをのばへ侍る。

合歡の旅ねおくゆかしくぞおもほゆる

素嶠居士は、をとゝしの春久しくやみて家にをはりぬ。麥宇は、西の國へ下らんとして伏見の舟の中にて、にはかに病おこりてむなしくなれり。したしき友どち、本行上人のもとによりあひける日、懷菁の附合して此ふたゝりのなき玉をなぐさむとて、おの〳〵香や花やといとなみけるに

夏くさのつゆもかゝるや反古さらへ

曲直老人、七十初度の賀にあはせて、あらたに家つくられしを

なつ桃に老せぬ門とたづねけり

夕立や耳のそこなる雛のこゑ

白雨や安居の杏の流れさる

ゆふ立のむしりて給へ門むぐら

題　長明

夕立や家こし車の雨そゝぎ

ゆふだちやまたあらためて百日紅

あつき日や軒のつまなし落もせず

暑き日や目をふるかたの烏賊の骨

あつき日のたよりともなれ青楓

あつき日やこゝろなぐさの桶の漏

天狗のうへを題にわかちて發句して戲けるに、呑熱鉄といふ事を

胸あつやあさ夕倦し茄子汁

あすも見むはつ花茄子吾なすび

讀莊子

ねぬや人蚕より大なるはなし

晝がほの赤みに人も秋ちかし

山家のなごし、いぐしたつるわざもなければ

おもふとみな白雨に流しけり

紙屑の袂をぬける御祓かな

みそぎ川こゝろねぢけし人もなし

成美家集

成美家集　下之巻

贅亭諫圃　帶菴子強　仝校
坎窩久藏　補定

秋

はつ秋や何の烟も眼にかゝる
はつあきやけさは柱に手のとゞく

立秋のこゝろを

灯ともすもまづめづらしや夜の秋
はや秋の柳をすかすあさ日かな

賣家のとなりにすみてけさの秋
淋しさにつけて飯くふ宵の秋

月僊上人の大なる茄子ふたつ畫るに書つく

汁好のうれしきあきにうつりけり

殘暑のこゝろを

七夕にねがひのひとつ涼しかれ
あふぎ臥あともまくらも天の川
ほしのあふ夜や我がちに草の花

薙髪してのち

たなばたや涼しいさへもうれしきに

窮郊井をさらふによしなし

銀漢豆腐の水にかよへかし
桐ひと葉手を打かへすけしき哉
よをこめて鼠はじきにひとはおつ
かりそめや壁に釘うつ玉まつり
なつと秋とふたつにわりし西瓜哉
燈籠や顔見し友はひとりなし
高燈籠見まじとすればめにかゝる
をどり來て山もとちかくなりにけり
珠數のすく袂も秋のかたびらや
角力とり霹の妻子もありときく
つゆの身とおもひもかけず相撲とり
秋のくれ立出にけりすまひとり

おくの乙二がもとより、かつし
かの秋の風、垣のはこべ實やむ
すぶなどいひこしける返しとは

なくて

くさの露蘂見し人をおもかげによく見れば露もしばらくひとさかりふつか三日四日五日露の置まさる我歸る家は見ゆるぞ露の中身ひとつは水汲ずともくさのつゆ

草庵餘長なし

のぞみならいくらもくれん露の玉美しや世にたとへたる草のつゆつゆの身といふもまとやまくらもと玉川はふたつも見たりつゆのあき家はみなつゆの中にてうつ火かな

乙二とわかるゝ時

つゆ浅茅たがひにながめられにけりいなづまや人のあゆみもおそいもの稲づまや念佛十疊の間に入いなづまや野にたつ人もあればある稲妻とひとつになるやくそかづらいなづまに梨子の接木のいたみけりいな妻を待や侘ねの探しもの

杖を曳て梅山居をたづぬるに、無門の關たかく鎖せり。いかなるか是秋風一時の情。

秋の聲門たゝけどもこたへなし

あさがほの句あまた作りける中

情出してさけよ朝がほ人もつゆあさがほのはや此秋を咲へらす杪子とるいもがあさ顔咲にけりあさがほをあすも〳〵とおもふ世かあさがほのはやしぼむ見るけふの秋

草堂兀坐

あさがほのさく見てけふも過すなり朝は霜夜はいな妻の世となりぬ

一日百句の中

牛捨る野にも立るやをみなへしそりかへるほどあはれなり女郎花秋風をまつとてたつやをみなへしはじめから吹をられけり女郎花かなしさのちらりと見ゆる萩の花簑むしよ甘露ふれりと人はいふ有明や馬のなくまできり〴〵す月や入癪に鳴よるきり〴〵す牛の尾にうたるゝ秋のほたる哉小屏風やたてはさまるゝ秋の蝶

蹋展無勞問惠休

杖むけてまづあはれなり秋の山柴の戸はあくるよりはやあきの風人すめばすむとてふくや秋のかぜ鶯も吹わけられて秋のかぜ身ひとつにかうまで吹かあきの風

鎌倉にて

名をとふや畠〳〵の秋のかぜ

病後

褄ふみてころびやすさに秋の風ひとつ灯の消もはたさずあきのかぜ

あたり へものむつかしきかき
ほに はひまつはるものあり。ダ
顏の露けき風情にはたれも〳〵
見なさず。そこに咲るはととふ

人もなきに、たま〳〵柴扉をたたける隱士に對して

はづかしや絲瓜にかゝる夕けぶり

なにはに一とせあそびて、來る年の月の頃には必歸り來むといふに、老後の露命おぼつかなしなどおもひながら再會の期を約して

それまでの命こらへん風の秋

かまくらにて

里人の鮒のぼりて月のくも

さびしさにたへたる人のまたもあれないほりならべむ冬の山里。

われまた庵ならべん心ざしあれば、其由上人の新居のまことにうらやまれて

月清しふところにせんかんなくづ

陰に居て月に座しきをゆづりけり

身のひまや朝寐よきころ月の頃

名月の雲にほゆるや山の犬

脚病一歩をすゝめず

名月を追ふてひけ〳〵庭むしろ

名月を大事にふくや松のかぜ

名月やとばつゝしむ夜の人

名月やわするゝころを風のふく

名月や葎の宿にかへりけり

草庵

名月のひかりばかりぞにぎはしき

名月にあふや小庭のひとつ瓜

名月を人にも見せずかくれざと

はや出しわが庭松に月は出し

家ふたつあれば月見るもやうかな

ふはとぬぐ羽織も月のひかりかな

十五夜

世にあくと人にはいひて月見かな

仲秋無月

雨見ゆるそれさへ月のちからかな

乙因が故郷におもむくわかれに

のぞみて

有明のひかりしみつく袂かな

世中やなるこ曳てもわたらるゝ

ちる木槿掃あつめては見られけり

白木槿毎日しぼむころをみる

何もせず木槿さくまで世はなりぬ

門の秋木槿咲簾ほつれたり

亡人呑溟がみづから寫せるひとつ橋集、わが方にとゞめありしを、つま子のもとへかへしつかはすとて

葛の葉をかさねて夢の古ざうし

秋江晩望

松芒そのほかのものなかりけり

ちゝぶ山窪いところや花すゝき

此おくにしる人もあれ花すゝき

これよりして秋の日よわるすゝきかな

芒はら果はしほやくにほひかな

飯櫃や下葉をれこむ風の荻

これさへもへりゆく秋よ唐がらし

秋はたゞなみだもろくも唐がらし

何人かすみて顔出すまどの蔦

ひと寐入よくしてきけばころもうつ

大かたの茄子たふれてうつきぬた

庚申の三弦のこるきぬたかな

箒木にかくれてうてる砧かな

陽子なくなりてのち、狂句をかしきふしもなき事をくゆ。ひとたびは亡人をかなしみ、ひとたびはのこれる命をめづらしとおもふ。悲憂かはるゞ〳〵胸をせめてこゝろほれたるが如く、狂せるに似たり。

しるやいかに我さま〴〵に秋の雲

浙江潮かれ盡てより春秋行かふと既に七度、ひさしく波浪の清音をきかず。俗耳を洗ふによしなし。

風悲しわすれぬをわが秋の友

喰て寐る身のつたなきに秋のくれ

閑中日月長といふことを

秋の暮鐘長閑なり人なしに

露の家は鴈とても寐や壁ひとへ

夜增戀といふ題に

夜の鴈かさねかけたるおもひかな

大竹もなびくや雁のわたりぞめ

破れ戸に釘もきかずや宵の雁

秋の日は雁の羽風に落にけり

眼のまへに蝶死でなく鶉かな

古杏や荻にかゝりてなくうづら

おろ〳〵と人に見えけり曉の鹿

やせ〳〵や身をつまだてゝ男鹿鳴

しかきけば木の葉のやうな我身なり

三夜さきくおなじ所やしかの聲

食に肉なし

わびぬれば柚味噌の釜を喰ひけり

蜻蛉もちとふりかへれ神路山

蛤の息もつきあへず野分ふく

淺草やすゑは稻葉に三日の月

みか月のひかりをちらす野分哉

後の月鴈大聲にとぶ夜かな

のちの月葡萄に核のくもりかな

白雨居士の一周忌に、人〳〵あつまりて追善のはいかいしける

日、懐舊のこゝろを

后の月かたりあふほどたのみなや

さゞ浪も身にかゝるかとのちの月

のちの月藜は杖にきられけり

尾花みだれてむなしくまねかず、桐おとろへて葉のおつるとはやし。臨海主人、にはかの病に物故のよしをきく。時しもあれとおどろかれて

後の月あれよとおもふ人はなし

右梁春蟻

老懐

酒はいかい口はさかりてのちの月

寐られぬ夜に

おもひ出るすかしもなくばいかにして

寐さむる秋の夜をすぐさまし

うれしさや夜さぶの陳皮唐がらし

茶をのめば目鏡はづるゝ夜さぶ哉

小判よむとなりをもちてよさぶ哉

長夜のこゝろを

秋の夜は松しまの松もかぞふべし

ながき夜を我にむかふや屏風の繪

骨柴の崩れてのちも夜ぞ長き
菊さくや五つはのこる唐の皿
夕ぐれにけふもまたなるきくの花
きく咲て雀の米も日和かな
行燈の晝さへ見えてきくの宿
きくの香に下部が桐油こゝろせよ
ひと壺のなめものなれて菊の花
みそ燒ば小金もへりて菊の花
菊を見て一日やりのこゝろかな

園女贄

菊の香をもてしづめたる硯哉

菊は花のとぢめなりとや、もの
ごゝろぼそきをりから

來年も見るとやすらんきくのはな
寒ければ顏もてよする袖みそかな
秋茄子藥に燒ぞあぢきなき
あきもやゝ黑みに入ぬからす瓜

閑室獨坐

日は過る梢の柿と見あひつゝ
吾ふくべ種なるまでに秋を見し
椎ひろふ浮世過すもやすいもの

神田祭

鄙の拍子はむかしにて花芒大名
衆の警固おごそかに、神輿のわ
たらせ給ふさまいと尊し。神人
氏人どもけふをはれと出立つゝ
はなかざれる車ども曳つゞけ、
笛鼓おもしろく打吹たる、實に
太平の音なるべし。此車を花出
しといふ。東の俗語なり。是は
加茂八幡などの祭に、出し車と
いふを出させたまふにおもひよ
そへてかくいふにや。

花出しやうごき出たる秋のやま

魯隱と舟をおなじうして此長流
にあそぶ。

かなしさや秋の日は入角田川
うら枯やふねは下るぞおもしろき
末がれやつきそこなひの鐘の聲
やま里は是を人目に案山子哉
見る人の唇かわくもみぢかな
水くむも浮世がましや夕もみぢ
我からの鼻息見えてゆふ紅葉
底すみて魚とれかぬる紅葉哉
ひよ鳥も來て悲しがるもみぢ哉
住なれて魚なき國のもみぢかな

若一王子の田樂踊、さはる事あ
りて秋の末におこなはれけるに
參りて、花のころは花もて祭る
といふ古とおもひ出て

舞人よ紅葉のころは袖のかぜ
名月もふたつ過たりつゆしぐれ
秋の果龜は小藪にはひ入ぬ
朝がほを芋と見るまで秋たけぬ
あきの日のさすやかぎりと山の腹

小の九月に

この秋は晦日さへなくて暮にけり
ゆくあきや門の小草のほつれより

暮秋のこゝろを

秋の山すそは時雨とふりにけり
音にたてゝふくべもなるや秋の果

暮秋

きり〳〵す曾我ものがたりよみはてず

冬

猿曳の小春機嫌に出にけり

大名のもみぢふみゆく小はるかな

名所

犬吼る畫も淀野のしぐれかな

人ゆけばやがてしぐるゝ野中かな

宵の中上野淺草としぐれけり

人は寐て鼠の顏にもるしぐれ

青草のすこしもあれば時雨けり

梟の身をまかせたるしぐれかな

蕉翁の像數枚を畫がきて、人〳〵にわかちおくるとて

くま刷毛に上野のしぐれそゝぎけり

光廣卿開書に、秀歌の躰大略狼藉無極者歟といはれたる定家卿の首をしめて、問たきなりと。此こゝろ誰もあるべし。

芭蕉會にその唇を守る哉

けふの供米を勸進申されけるにつかはすとて

はせを會に瓢の底をたゝきけり

几董が伊丹といふ所にて、にはかになくなり侍りしよし、はや便にいひこしける。風雅にかゝづらふ人の道路に死なん、是天の命也と、はせを翁も書のこし申されける事などおもひなぐさめて

旅笠をつひのやどりやかれ尾花

一天四海皆歸妙法

御命講子どもの親も呼れけり

十夜

酒賣の十聲ひと聲たのみあり

すくひとれ十夜の汁の芋杉子

見佛聞法

生海鼠さへこの時にあふ十夜哉

十夜とて袖ふりあふもたのもしや

葱の玉神のお留守とにほふなり

木がらしの人も草木に似るものか

こがらしのふくや瓢の種をさへ

木がらしになに事もなし豆腐槽

落葉して日なたに立る榎かな

貝むきが手もとまぎるゝ落葉かな

明るまで人はよく寐ておちばかな

鷗まで落ば寒がる風情かな

人さらに狸のあとをふむ落ば

この頃の疊ざはりも落ばかな

落ばして小寺〳〵のあそびよき

鳥めらが來ては屋根ふむ落ば哉

日みじかに見てもをらるゝおちば哉

ちる木の葉いくへの下の我ならむ

花にうかれ月をもてあそびしも

すみだ川木の葉がちにもなりにけり

松竹におもひもいれずみそさゞい

浙江二七日に

人をとふ我も冬野のきり〴〵す
見るほどに歸らんとおもふ歸りばな

わがすむ軒端つゞきの其由上人は、今の月川大德の古き名を乞得て、狂句にあそばんといふをよろこぶ。

水僊に霜の白さをつたへけり
水仙は葱のきはにて咲にけり
麥まきやその夜狸のつゞみうつ
辛崎の松も見ゆるや大根びき
かまくらやをさまる御代は大根曳
大根ひくその夜や松にきり〴〵す
大根ひきて松はひとりになりにけり
長明が車もおせや大根ひき
棒提てゆけば鴨なく澤邊かな
ぬす人も妹とぬる夜やなく乳鳥(チ)
川千鳥牛の喰ものなかりけり
肩ほねの鳴るにつけてもなく千鳥
すみ〴〵にものおく冬の夜はをかし
炭つむも物氣に入らぬ浮世かな
炭なしといふ聲小夜も更にけり
鐘なるやすみのはねしも宵のこと

炭といふ題に

木のはしの法師も炭により給へ
いつまでか嵩にもならで古ぶすま
引かぶるよし野のおくの衾かな
うなり出す三斗の釜も霜夜哉
旅人の捨た箸なり曉のしも

老情

寐つくさへ拍子ものなり霜の月

哭巢兆

三十餘年の舊交、たゞ一時のあだことゝなりてながき恨をいだく。書齋の雅名も今朝一片のけぶりとともにあとかたなし。

なにごともひとつ殘らず霜の草

亡妻が墓まうでして

塚の霜われも苔にはちかき身ぞ
鋸をかるも戻すも寒さかな
家さぶく桐の赤葉のひとつ哉

寓(偶カ)感

つたなさの寒さにつれてまさりけり
藤棚の下に米つく寒さかな
賣てやる夢さへも見ず冬ごもり
あさ顏の蔓もはらはで冬ごもり
うしろには松の上野を冬ごもり
ひとつ灯にひかりかはすやふゆの月
梅などもうめと見ゆるやふゆの月
はつ雪や灰にかいたる梅のはな
から家とおもへば煙る雪のくれ
あさのゆきおなじ文こす友ふたり
魚くふて口なまぐさし晝のゆき
さゝやくもたま〴〵見えて雪の人
雪になほけしきもてとや鐘がなる
ゆきの日は腹たつ人も來さりけり

擬一瓢

雪の日は痴氣の虫も音をいれぬ
ゆふべまで捨たい宿をゆきの宿

醉人狂客かはる〴〵見まひ來れば、塵のこゝろ物にうつりて靜なるいとまなし。

しはらくは雪にかくれん市の門

韓人不二を見る畫に

のけぞりて雪の上なる雪の山

ことしは市中に居をうつして

大雪や我を山家に庭の松

氷捨てゞ何となくあはれなり

我やどは氷をつるすあたりかな

梅の咲をりもあらうか厚氷

柴の戸や氷しまゝに捨ておく

月霜や齒ぬけとなりて鉢たゝき

ふとん着て山さへ寐るをはちたゝき

枯菊をまたもてはやすあられかな

豐鑑禪師の虎によりてねぶれる

圖

冬至なりふたりのわつぱはや戻れ

冬至とて疊の髭を拭せけり

くすり喰箸を下せば鐘がなる

河豚汁妻といふものなくもあれ

君が代は誰もくふなりふぐと汁

孔子盜跖一應埃

河豚くはぬ人さへもまた夢なれや

久峨と題をさぐりて

から鮭は花さかぬ梅の木ぶり哉

暑天にあふぎ臥て、わが書をさらさんといひしものしりのうへにはさもあるべし。このはいかいのまじはりは、

から鮭の腹にはかくすものもなし

乾鮭の梅を喰をるけしきかな

冬の夜やどこを明ても月はさす

寒月や藥の紙のそらにとぶ

寒月の柳などにはかたぶかず

寒月やひとり破れしくすり瓶

ひく汐の淺くさすぢ(筋)や寒の入

寒聲を鬼もきけとや羅生門

埋火や我名わするゝこゝろあり

うづみ火やよし野のおくも是あらば

埋火や眉やくばかり小夜ふけし

虬戸ぬし、舊里にかへる。春はまたかへりのぼらんといふに、其

詞かならずわするなといひて

梅さかばおもへ爐に手を交へしを

讀莊子

腮の髭火桶に臍をかくしけり

仁波海の外にながれて琉球の勝使まうで來しに、おほやけよりさま〳〵のものたまひ、から衣秧ゆたかに、おもゝちほこらしげにゆきかふさまめづらし。

よき時をうるまが袖に寒鷄卵

成美みづから心にとふ、かしらの雪霜はらふべくもなく、腰に梓の弓をかけたり。なにごとをいとなみ、なにとかなれる。東都十年もなほ遠なりといはむか。我こゝろ是にこたふるにことばなし。たゞ

籠の目にとしこそたまれ事納

すゝはきや水うちかけし松の色

まがはしや小家〳〵の煤はらひ

せきゐに市のかくれ家見られけり

節季候はいかなる人のなりぬらん

せきゐよ名のため狂ふ人もあり
せき候にふみ過らるゝ伏家かな

三十九の暮に

さすがまた老といはれむあすの春
年はかく氷をはしる入日かな
はや暮よ三日ばかりは何にせむ

題畵

畵襖の人にもとしのくれゆくか

かつしかの草堂

しづかさにおほえられつゝ年ぞゆく
貧しさにたゞ居するなりとしの暮
脊をほすも入日がちなりとしのくれ
としくれぬ喰もはたさぬ唐がらし

雜

秋の雲そゞろにはしりて、陽子が[illegible]。もし

たのつゆむら〳〵見えて、陽子があだなるちぎりをおもふ。陽子なくたりて後、われ世にいけるかひなし。われさらに陽子をわするゝ事なし。陽子、地下にわれをなにとかおもふ。

ひとゝせはよくもへにける命かな

翁の像に題す

笠を着て草鞋ながらの佛かな

鶴

すぼ〳〵と夕ぐれて見ゆ鶴の尻

鸚鵡

留守〳〵と宿の鸚鵡にいはせけり

樵夫

木をこりてかくまで老ぬあすもまた

母のうせける時

母なしに我身はなりぬ身はなりぬ

去來叟百年忌辰

人は土地の清きによりてよく聞に、土地は人の雅なるを得て其名ます〳〵久しきにつたふべし。去來叟が落柿舍における、人と所とふたつながら相得たりといふべし。

初戀

それよりして見し人はなし嵯峨の山
きのふ見しも詠られけり庭の草
親猿の愚かに見ゆるもあはれなり
いづかたに車はとまる夜のあめ
我宿やとしぐ〳〵山によりかゝる

文化十三年子七月開板
江戸書林
中村屋武兵衛

跋

家君夙攻徘諧之學簿書計筭之暇情之所遇節序景物離合忻戚慨今懷古備以成章其至斟形迹於無朕洩造化於傳神乃語言文字外別出一機軸矣於是四海賢達郵寄賡唱推為壬盟焉晩罹疾退老葛飾之瀨頤志泉石每長林清寂水流花開環坐兒孫吟哦自娛積久成帙人有請上梓刷印以貽於海區者必拒之曰老鈍頽唐每意與境會結習未除聊復爾二要之意薄色淡矣

跋

家君夙に俳諧の學を攻め、簿書計算の暇、情の遇ふ所、節序の景物、離合の忻戚、慨今懷古備さに以て章を成す。其の形迹を無朕に斟み、造化を傳神に洩すに至つては、乃ち語言文字外、別に一機軸を出す。是に於いて、四海の賢達、賡唱を郵寄し、推して主盟と爲す。晩に疾に罹りて、葛飾の瀨に退老し、志を泉石に頤くす。長林清寂水流れ花開く毎に、兒孫を環坐して吟哦自ら娛しむ。積久帙を成す。人の上梓刷印以て海區に貽らんと請ふ者有れば、必ず之を拒んで曰はく、老鈍頽唐、意と境と會する毎に、結習し、未だ聊復爾々を除かず。之を要するに、意薄く色淡く、奚んぞ觀に當る

是當觀哉今茲二三同盟
與子弟輩心期於必傳固
請刊之乃拔為六百三十
七裒為二卷又命余記其
後因謹録嘗所聆左右者
記其後云

文化丙子春正月

男包壽撰

に足らんやと。今茲に二三同盟子弟輩と、心に必傳を期し、固く請うて之を刊す。乃ち拔いて六百三十七と爲し、裒めて二卷となす。又余に其の後に記すことを命ず、因つて謹て嘗て左右に聆く所の者を錄して其の後に記すと云ふ。

文化丙子春正月

男　包壽　撰